

2022年2月17日第2回厚労省との意見交換会(オンライン開催) 簡易議事録

<出席者(敬称略)>

- ・厚生労働省医政局 2名
- ・日本医療機能評価機構(以下「機構」) 3名(鈴木理事他)
- ・産科医療補償制度を考える親の会 代表中西、副代表八幡、他約14名
- 発言者: 中西、八幡、玉田
 - 会員C「個別審査対象外家族の“思いと生活実態”」
 - 会員D「個別審査対象家族の“思いと実態”」

<厚労省・機構から要望事項への検討の報告>

- ・個別審査補償対象外児の救済は困難。脳性麻痺にはわからないことが多く、従来の基準に誤りがあったわけではない
- ・今の仕組みの中では個別審査補償対象外児への原因分析を行うことは難しい

<その他本日の議論>

- ・剰余金の使い道の意思決定は誰か
 - 厚労省・機構・保険者

- ・今の制度で救済できるのか

→現時点では困難

- ・剰余金の使い方を再検討できないのか

→未来の人に使うという指針が決まっている

- ・見直す余地はないという結論か？

→今は不可能

- ・遡及について議論はしたのか

→過去に議論はしている

- ・救済して損する人がいるのか

→損得の問題ではない

- ・救済に向けてなぜ動いてくれないのか

→機構/制度の枠を外れた部分での議論になるので、運営を任されている立場として難しい

→厚労省/無回答

- ・救済の実現に向けて親の会はどうすればよいのか

→厚労省・機構からのアイデアはない

再三、解決策と一緒に考えていく事を願うするも「困難」という言葉を繰り返し、「検討します」という言葉すら出なかった。

意見交換会が平行線で終わってしまう事への打開策も求めたが、終始沈黙を貫いていた。その為、次回以降は、話を前進させることが出来る立場の方に同席をお願いした。

第3回意見交換会は3月開催予定

全体的な第2回意見交換会の流れとしては、冒頭で先方が前回の意見交換会に対する回答として、ネットに公開されているような産科医療補償制度に関する定型文を早口で読み上げてきました。

こちらは、その文書の読み上げが何に対する回答をしているのかも不明。棒読みで定型文を一気に読まれ、話し合う姿勢が無い事が感じ取れました。

定型文の読み上げられた後、親の会より「棒読み早口の定型文では何もわからなかった」という旨を伝え、読み上げた内容の書面をもらうことをお願いしました。そして、次回以降も、同じように準備してきた文書を読み上げるだけのつもりならば、事前にそれらの書面をこちらに提出頂きたいとお願いしました。それに対しては、そのような事前の書面提出は、通常していないと渋っておられました。

話し合いが進むよう、別の立場や機関の方に同席してもらい、今後は進めていくことを希望しているが、先方からの回答はまだ得られていない。